

エンダイブ・秋冬どり（品種：フランス）

安房農林振興センター

1 地区名（集団名）

南房総市富山地区（JA安房野菜部富山支部エンダイブ生産者）

2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 6戸
- (2) 栽培面積 84a
- (3) 収穫量又は出荷量 117.6 t
- (4) 出荷先又は販売方法 安房農業協同組合

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	2回	5回
化学肥料（窒素分量）	10kg/10a	12.5kg/10a

4 事例のあらまし

エンダイブは非結球レタスの一種です。和名では「ニガチシャ」と呼ばれます。その名の通り、菊のような姿と、ほろ苦い味が特徴です。管内では富山地区と鋸南地区で栽培されています。

JA安房野菜部富山支部では、現在17戸がエンダイブの生産に取り組んでいます。そのうちの約1/3にあたる6戸が、平成18年度からちばエコ栽培をスタートしました。

管内で生産される有機質資源を有効に活用し、土づくりを行っています。

5 背景・動機

安房地域は古くから洋菜類の栽培が盛んだった地域です。中でも富山地区はセロリやさやいんげんの産地として知られています。エンダイブも終戦後から栽培が始まり、共選出荷が始まってから20年以上の歴史を持つ産地です。

しかし、近年農産物の価格低迷が続き、他産地との差別化を図る必要が出てきました。また、無登録農薬の使用問題や、輸入農産物の残留農薬事件などを受け、マイナー作物であるエンダイブの生産は、難しい立場に置かれました。

薬剤が限られている中で、安全性と品質を両立した物を出荷するため、産地では努力を続けてきました。

「この取り組みを消費者の目に見える形にしたい」「生産者の顔の見えるエンダイブを届けたい」という産地からの声を受け、平成17年にエンダイブのちばエコ栽培基準が設定されました。そして18年に栽培計画の承認を受け、ちばエコ栽培が始まりました。



順調に生育する「ちばエコ」エンダイブ



収穫・調整後の荷姿

6 栽培方法

(1) 土づくり

安房管内の畜産農家が生産している牛糞堆肥を利用して、土づくりを行っています。また化学合成肥料の削減のため有機配合肥料を利用します。

(2) 播種・定植

セルトレイに播種し、1ヶ月程度育苗して定植します。時期をずらしながら、数回に分けて播種・定植を行います。

(3) 病虫害防除

銅水和剤など「ちばエコ農業」化学合成農薬に含めない農薬を活用し、化学農薬の使用回数の削減を図りました。また初期防除の徹底のため、定植時に粒剤を使用します。

(4) 結 束

エンダイブは苦みを和らげ、おいしく食べるために中心部を軟白させます。このために、株を結束する作業を行います。結束中に蒸れると病害の発生や、品質の低下を招くので、作業には細心の注意を払います。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成18年4月24日
起 耕	8月5日
播 種	8月15日
定 植	9月7日
病虫害防除	9月3日～11月10日
収穫開始	11月20日
収穫終了(予定)	平成19年3月31日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10a当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
牛糞堆肥	平成18年8月20日	0.9 t		
鶏糞 (3.8:6.6:3.1)	9月3日	300kg	11.4kg	
有機アグレット088号 (10:8:8)	9月3日	200kg	20kg	10kg
合 計			31.4kg	10kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
カルホス微粒剤F	ネキリムシ類	平成18年9月3日
アフーム乳剤	ハスモンヨトウ・オオタバコガ	11月10日
※Zボルドー	斑点細菌病・軟腐病	11月10日

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

7 今後の展望等

ちばエコ栽培に取り組むにあたり、栽培計画については生産者の話し合いが重ねられました。このことをきっかけに、生産者に生産履歴記帳の重要性が再認識され、土づくりや農薬に対する意識も変わってきています。また、今年申請をした生産者だけでなく、他の生産者もちばエコ農産物に対する関心が高まりました。安心・安全な栽培技術の向上に取り組むとともに、今後は関心を持った生産者を中心に、ちばエコ栽培の拡大を図っていきます。

千産千消の観点から、県内市場を中心とした出荷から開始しました。また、地元でもエンダイブが手に入るよう、直売所での販売も行っています。今後は出荷量の増加と、

京浜市場も視野に入れた出荷を目指します。

エンダイブは、まだまだ馴染みの薄い野菜です。まず消費者にエンダイブを知ってもらう必要があります。また、ちばエコ農産物自体の認知度を上げることも必要です。今後はエンダイブの消費提案や、他の作物と連携し、ちばエコ農産物のPR活動等を検討したいと考えています。